

SSC

一学校生活支援部
活動記録一

吉兔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊ヶ峰高校には、ちよつと特殊な部活動がある。

その部活はこの学校に在籍さえしていれば、生徒は勿論、教師や用務員までもが依頼のできるなんでも屋。

それが『学校生活支援部』である。

部長である。不動真澄は過去のとある事件を自分の父や兄が経営する老舗デパートからなる財団の権力によって解決したが、自らの力のなさを実感し、この部活を立ち上げる。

そんな、1人で始めた部活の存続の危機。

部員の数^がが足らず、部員集めから始める活動記録。

集まった個性的な部員と共に

さあ今日も支援しますか……

目次

依頼1 部長の部員名簿

忙しさのない日常	1
非日常のお出まし	5
その人、友人と呼べる者	18
世間つてのは結構狭いもの	26
あの花の花言葉は。	34
彼、かれ、カレ	42
詮索と覚悟と遂行	49
集合	71

依頼Ⅰ 部長の部員名簿

忙しさのない日常

周りの人々は幸せだ。皆の心の内を見れるわけでもないし、その人たちと会話して幸せですかと尋ねたわけでもない。だけど、自分とすれ違う人達は皆前を向いている。笑っている。微笑んでいる。とてもいい笑顔でいる。そう自分には見えた。

そんなことを思っている自分はどうかと聞かれた場合、自分はNOと答える。家庭環境はとも恵まれているし、今まで生きていた中で幸せを感じたことだって幾度もある。けど、考えることが多くなるにつれて、何を、もって幸せというのか、自分が幸せと思う定義って何なのかと考えると答えはNOになる。単純に考えたらいいのかもしれないと感じてないだけで幸せなのかもしれないのに、ひねくれてしまった。

そんなことを考える退屈な帰路だった。

「ただいま」

「おかえり真澄、今日は早いじゃん。いつもは19時回るのに」

「学園祭も終わったし、部活もなしにしてきた。そんなことよりも、姉さんも早くないか

「？」

「今日はオフ。最近派手な服ばっかり見ているから目がチカチカしている。」

アイマスクをつけてソファを独り占めしているのは、姉である不動綾愛ふどうあやめファッションデザイナーであり、自分で立ち上げた会社は人気ブランドになって最近は大忙しだそう。うちの兄弟姉妹は化け物ぞろいだと感じている。

「アンタも十分化け物よ。」

「人の考えを読むな！」

「アンタと違って、人の考えなんて読めないっての！顔に出てた分かりやすい。」

「うそだ……」

「ホント。家にいるときは表情に出る癖に、なんで外に出ると無表情にすぐ成れるの？わけわかんない。」

「アイマスクしてるのに表情なんて見えるのか？」

「…失礼なことを考えている雰囲気はすごく感じた。」

「すみませんでした…」

ガチトーンで言われてしまったので、反射的に深々と謝ってしまった。姉さんは分かればよろしいと言わんばかりの顔している。自分はそれを横目に昔からあのトーンに逆らえないことを再度実感した。

「あ、言い忘れていたけど今日、神兔は父さん達とご飯食べてくるらしいから、夕食アンタが作ってね。兄さんも帰ってこないから二人分。買った材料はテーブルにあるから後宜しく。」

「わかった。」

言っていた通りテーブルの上には買い物袋が置いてあった。中身は人参、玉ネギ、ジャガイモ、豚肉、糸こんにやくが入っている。確信犯だ

「姉さん……これって狙ってやってるよな。」

「分かっているじゃない。神兔がつくるより、アンタが作る方が美味しい。」

「姉さん……それ、神兔に言うなよ。怒って一週間飯抜きはもう嫌だからな。」

「わかってるって。」

前回の元凶が軽く返事を返した後、自分は夕食の準備に取り掛かることにした。今晚は肉じゃがだ。

夕食が済み、片付けが終わった後。リビングで何となく付けたテレビを見ながら、溶けるようにのんびりしていると妹の神兔がかえってきた。

「お帰り、神兔。あれ？父さんと母さんは？」

「おとうさんは、『これからは兄弟姉妹で協力して生活しなさい』って言って海外に行っ

ちやったからそのこと気にし帰ってきづらいらしいよ。おかあさんはとことん付き合
うんだって。本当に仲がいいよね、うちの両親は。」

「そうだな。じゃ、自分は寝るわ。受験勉強しすぎるなよ。」

「わかってるよ。おやすみ真澄兄。」

「おう、おやすみ。」

そういつて自室に向かった。

寝る前にパソコンを立ち上げ、「RAIN」というコミュニケーションアプリを開き部
活動に関するメッセージが着てないのを確認した後、ベットについた。

学園祭も終わって、日常通りになることを思いながら眠りにつくのだった。

非日常のお出まし

——人は自分のことが好きな人はそう多くないはずだ。

自分もそうだ。嫌いだ。大つ嫌いだ。なぜこんなにも自分が嫌いになったのかは、たった16年しか生きていない人生の中で自分がどれだけ無力であるかをたくさん感じてきたからだ。だから、無力でも、自分が嫌いでもそんな自分を「好き」と思えるよに生きている。

そんな日が来るといいなと願いながら。

放課後、黄色い声が教室に飛び交う中、自分は読書をしていた。ふと、時計をみると16:20を回っている。そろそろ向かわねばと思い、お気に入りの場面に葉を挟み、本を入れたバックを右肩に掛けて教室を出た。自分が教室を出るとき、出口には誰一人視線を向ける人はいなかった。

いつもの何気ない日常だが、「ゴゴゴ」に來るとそれが音を立てて崩れていく感じがす

るのは多分、自分の気のせいだろう。今いる「教室」は学校の北館4階にある。ほかの教室と違いは全くないのだが、一つだけ挙げるとするならば、ここが事故によつて使われなくなつた教室だということだ：

数十年前、自分が通う遊ヶ峰高校のこの教室の窓から恋仲にある男女生徒が飛び降り自殺をした。警察の捜査によると、どうやらこの時代にしては珍しい心中というらしい。当時の学校は対処に追われて大変だつたそうだが、生徒達はそんなこと全くなく、悲しむよりお祭り騒ぎのようにはしゃぐものが多かつた。なんせ恋人同士の心中だから、色恋沙汰が大好きな高校生たちは興味があるだろう。しかし、今ではそんなこともなく、ほとぼりも冷めて二人の霊が出るだの、近づくと呪われてしまうだのと、不気味がる人が多い。だが、自分はそれを利用して、「学校生活支援部」通称「学援部」を立ち上げた。

学年主席でこの学校に入学した自分は、前々からこの教室の話を知つていた。そこで、この学校入り、自分が必要とされる為、自分が無力と思われぬ為の居場所をつくつた。其れが、「学援部」だ。

今のところ部員は自分一人。活動内容は、先生や生徒会の雑務、委員会の代理や肩代わり、部活の助つ人等だ。まあ簡単に言うと、この学校限定で、ここの学生と先生だけが使えるなんでも屋つてことだ。「奉○部」……とはちよつと違ふな。どちらかと言うと

「ス〇〇ト団」に似たような感じととらえてもらってもいい。この部活を立ち上げて8か月だが、なかなか人が来て退屈はしていない。

何やかんやでそんなこの部活と部室が結構好きなのだ。

自分が定位置である机に腰を掛けた時、部室のドアが開いた。

「よっ、真澄。人助けしているか？」

「あつちが自分を必要としているだけで、あつちが勝手に助かっているだけですよ、きすい皇翠新会長。」

この学校の新会長、鈴鳴皇翠先輩。雅な名前の通り先輩の家は天皇家らしく。現天皇の甥っ子らしい。たびたびニュースにはなるが、このフランクさが天皇家の人と思わせないほど接しやすく親しみやすい人だ。

この部活を生徒会に提案した時、真っ先に案を受け入れ実行に移しいてくれたのが、当時副会長だった先輩だった。正しく恩人である。

「まあまあ、そんなこと言わない。それよりも君は、一人で部活をやっていくつて言っていたよな。」

「はい。今でもそれは変わりませんけど…それがどうしたんですか？」

「すまん!!いくら学校で評判が良くても、顧問、それから部員が一定数居ないと校則で部

活として認められないんだ。けど顧問を引き受けてくれた先生は見つかつたんだが、流石に部員の確保までは……な。だから部員だけは自分でどうにかしてくれないか？」

会長がここまでしてれたのに頭を深々と下げた。

「会長！そこまでしてもらつてありがとうございます。とりあえず、頭を上げて下さい。本来なら、自分がしなければいけないことなのに。」

「わかつた。けど伝え忘れたのはこつちの落ち度だ、だから、ここまではしたから後は自分で宜しくたのむ。」

「勿論です。それで顧問を引き受けてくれたのはどなたですか？」

「顧問は司書教諭の睦月先生。現代文を担当している。基本的に仕事が多い人だからこつちに顔を出すのは少ないけど、それでもいいよな？」

「分かりました。勿論、大丈夫です」

本当にありがたいです。神様、仏様、皇翠様ありがとうございます。

「人数に関して、君と後3人必要だから、そこはまかせた。新学期まで待つてもらえるらしいから。」

「はい、これからもよろしく願います。」

「おう、じゃな」

そういつて会長は部室を出ていった。

これは困った新学期まで休みを抜かしたら二か月とちよつとしかないぞ。依頼はたくさんされたが、誰一人仲がいいわけない。頼れる奴は一人いるが、受けてくれるかどうか…

とりあえず、自分ができるところをしよう

「それにしても、どうしたものかな…」

そんな独り言が静かな部室に寂しく響いたが、すぐさまドアから軽快な音がした。

「はい、空いてるのでどうぞ。」

「失礼します。」

そういつて入ってきたのは、自分とは縁遠い人物が来た。

篠原莉奈。自分と同じ…いや、自分よりも成績がよく、容姿端麗、運動もそれなりにできる1学年、否、この学校のマドンナと言っても過言ではない人物だ。だがなぜ、何不自由のなさそうな人が、こんな部活に一体何の用なのだろう

「ようこそ学援部へ。ここでの依頼内容等の情報はすべて口外しませんのでご安心ください。」

自分はいつも通りの言いなれたセリフをいつて依頼者を座らせ、部室の掛け看板を「空いています」から「入室禁止」に変えて、自分も席に着き、話を進めた。

「では、どういったご依頼で？」

恥ずかしがり屋なのかわからないが、彼女は数分ほどソワソワ、もじもじとしていたが、覚悟を決めたのか、うつむいていた顔を上げこちらを向き、口を開いた。

「ここではどんな依頼でも良いんですよね？」

「はい、達成不可能な依頼でなければ。」

「では！一日だけ私に傍にいてください！」

「……はい？」

「どういうことだ？今、そばにいてくれといいましたか？こんな美少女から？あり得ない。まったくもってあり得ない。多分聞き間違いだらう。そうであってほしい。」

そんなことを一秒の間に考えていると、彼女は再び口を開いた。

「あ……少し言葉足らずでした。一日だけ私の従者になつてください。」

確かに言葉が足りてはいないが一日一緒にいるということは全く変わらないじゃないかないか!!とはいっても、理由を聞かないと、依頼を受けるに受られないので

「…分かりました。と、とりあえず、理由を聞かせてくれませんか。」

「私の父は、二条製薬社の社長なんです。なので私は社長令嬢というやつですね。それを隠すためではないんですけど、一応父が何かあるかわからないからと苗字は母方の篠原を使つてます。」

「なるほど、似てますね。」

「何が似ているんですか？」

「すみませんこつちの話です。遮ってすみません、話を続けてください。」

「あ、はい。今週末にとある大手デパートが主催するパーティーに父から強制参加をさせられてしまいました。今は一人暮らしをしているのですが、父はボディガードぐらい付けなさいと言われまして。探したんですが見つからないし、お金を使うのを躊躇ってしまっている内に期間が近づいて今に至るわけです。」

「それで学援部に依頼したわけですね。親御さんはこのことを話したんですか？」

「はい。不動さんの印象を話したところ。お許しを得ました。」

いろいろ突っ込みたいが、とりあえず一つだけ…

それでいいのか篠原家!!

笑顔で許しを得ましたと言われても、自分、篠原さんの親にしれっと紹介されているというすごく複雑な気持ちになる。

「それで、依頼は受けてくれますか？」

「はい、自分でよければ受けさせていただきます。」

「ありがとうございます！」

「では、RAINに援部のアカウントを追加しておいてください。学校の生徒用ブログの方にアカウントのQRコードがありますのでそちらからお願いします。何か変更点

や相談がありましたら。こちらのアカウントまで連絡をください。

「ありがとうございます。では、よろしく願います。」

そういつて篠原さんは部室から出ていった。とんでもない依頼内容だった。とは言え、人が悩んでいるのを見捨てることができないのも事実だ。

自分はイスに寄りかかりそのまま腕の力を抜いた。

「それにしても、篠原さんの依頼ぶっ飛んでたな。しかも、自分の知らぬ間に親御さんの信頼を得ているとは……どういった話をしたんだ。とりあえず不思議で仕方がない。もしかしたら、親御さんは自分の事と知っているかもな、あのブラコン兄貴が話している可能性もあるし。」

二条製菓社の令嬢なのだ。もしかしたら、あの兄弟大好き長男が、言い広めてることだつてあるだろう。全く迷惑とは思えない。

そんな憶測をしていると、パソコンから通知音が鳴った。すぐさま確認すると篠原さんからのメッセージだった。

『依頼を受けてもらいありがとうございます。パーティー会場は仙道ホールディングス本社ビルです。明後日、部室にお邪魔しますので、細かい打合せ等をお願いします。後、パーティー用の衣装はこちらで用意しますので服のサイズ等を教えてください。』

とのことだ。自分はすぐさま返信をして、パソコンの電源を落とした。その後、身支

度を整え、掛け看板を「本日終了」に変え、施錠をして部室を出ていった。

家に帰ると、いつものようにリビングでくつろいでいる姉妹の姿があった。

「ただいま」

「真澄、お帰り。」

「お帰り、真澄兄さん。夕食、テーブルにあるから食べたらいし片してね。」

「おう、いつもありがとな、神兔。」

「う、うん。」

「姉さん、兄さんはまだ帰ってないよな。」

「遅くなるってさ。会社引き継いでから忙しいらしいよ。今週末パーティーするらしいしから其れの準備もあるって。」

「やっぱりか。」

予想していた通り、うちの会社が企画していたようだ。

うちの家は、江戸時代末の呉服屋から始まり、歴史の流れとともに、呉服屋から洋服屋、そして、今のデパート経営になっている。デパートとしての経営も長く単体だけでも70年以上の歴史があるという老舗デパートだ。呉服屋時代を含めると何百年も続くことになる。まったくすごい家系だ。

うちの会社を血縁が継ぐ場合、その血縁は「仙道」の名を受けることになる。うちの父さんも仙道の苗字を受け継いだ。そして、父さんが60歳で退職した後、長男の雄哉ゆうや兄さんに仙道の苗と代表取締役社長の座も引き継がせた。

今現在、兄弟姉妹4人で一軒家に住んでおり、両親は海外暮らしをしている。なんせ海外暮らしは、母さんの長年の夢だったらしく、仲睦まじくヨーロッパにいる。そんなオシドリ夫婦の三番目で次男なのが自分だ。

「で、アンタはどうするの？ 兄さんには真澄には来てほしいって常々言ってるんだけど。」

「分かった。行くかどうかは兄さんに直接聞いてからにする。姉さんと神兎はどうするんだ？」

「その日は重要な会議があつて無理……はあ、久しぶりに会えると思つたのに。」

姉さんよ。そんなに彼氏に会えないのが寂しいのか？ その感情、自分にはわからんな。

「私もパス。友達と合格祝いに遊びに行くから。」

「なるほど……」

兄さん、忙しいのは分かるが兄弟に来てほしいならもつと早めに言いなよ。たまに抜けるているのが傷なんだよな。

「じゃ、私お風呂入るから。お先〜」

「待って、綾姉。わたしも一緒に入る。」

姉さんの後を。パタパタと神兎が追いかけて、二人は浴室へ向かった。

「さてと、とつとつご飯食べてはよ片づけますか。」

自分は食事をとり、台所を片付けた後、自室に行った。

「ただいま……つて、ん？なんだ全員寝たのか。」

リビングで帰宅した兄さんのいかにも寂しそうな声が響いた。自分は自室から出て一階に降りた。

「ほら、起きてるぞ兄さん。まったく兄弟離れせんかい、このブラコン兼シスコン。」

「おう、真澄。ただいま。で？おまえがこの時間まで起きているということは俺に話があるんだよな。それも週末のパーティーの話だな。」

「流石、兄さん。話が早い。」

「というか恐ろしいほど、ばつちり当たってます。どこぞの劣等生ぐらい『さすおに』です。」

「それで、お前からパーティーに行くとか珍しいな。人今回のパーティーの出席は俺としてはすつごく嬉しいけど、人の多い場所にめったに顔を出さないお前がな。なんだ？彼女でも作る気か？リア充にでもなるつもりなのか!? いや〜ああいう場所には、お前の

好きな人はいないぞ〜」

「ああ、もう！うるせえ！大きなお世話だつていうか、そうじゃない：部活の事だ。もしかすると、その社交パーティーが依頼場所だからな。一応確認のために聞きたい。二条製菓は来るのか？」

「ああ来るぞ。もしかして令嬢ちゃんを狙ってるのか？」

「やっぱり知っていたのか。狙ってはいないが依頼だ。」

「そういうことか。じゃ、深くは聞けないな。」

「ああ、そうしてくれ師匠。」

兄さんは、俺が通っている学校のOBあり、小学生の頃にいろんなことのいろはを教えてくれた。所謂、師匠、でもある。俺が部活を創りたいと言ったときに、部室の事や、立ち上げ方も教えてくれたのも全部、師匠である兄さんに教えてもらった。

「ああ、わかつてる。俺と違って秘密主義が特徴だもんな。お前の部活は。」

「分かつて凄く助かるよ兄さん。と言うことで俺は参加するよ。」

「わかった。名簿どうする？二条グループの返事待ちでいいのか？」

「そうしてくれると有難い。変更があつたら連絡する。」

「承知。んじゃ、当日は顔見せしてくれるよな…」

「そんな、暗い顔しなくてももしかっかりするさ。」

「おう、そうか！」

「そーだよ、じゃ寝るはお休み。」

「まてよ、学校はどうだ。」

そういつた兄さんと他愛のない話をした後、自室に戻ってベットに飛び込み、すぐの眠りについた。

その人、友人と呼べる者

依頼でキツキツの土日が過ぎ、またいつもの月曜日が来た。土日も学校に入り浸っていたせいか、曜日感覚がなくなっているみたいだ。いつもこんな感じだがなんか複雑な気分だ……まあ、そんなこんなで放課後となり、自分は部室へと向かった。

部室に行くくと部屋の前に一人立っていた。自分はその人のもとへ駆け寄ると、その人も気が付いて、こちらにペコリと挨拶をしてくれた。

「あの……お久しぶりです？……すみません何と挨拶すればいいか分からなくて……」
「こんにちは、篠原さん？でいいのかな？」

事情を知っているいまこれであっているのか、こちらもどう呼べばいいかわからない。

「はい、それでお願います。誰かに聞かれると厄介ごとに成り兼ねないので」「分かりました。それで、今回はどういった内容ですか？」

「それは……部室に入ってからでいいですか？」

そう言つて、自分は部屋の鍵を開けていつもの掛看板をかけた。

篠原さんからは依頼当日のこと、集合場所や時間等、その後どう行動するかの話

を話した。そして、当日の服装も用意して持つてきてくれたようだ。

「それで、これが当日の執事服なんですけど、サイズ合わせの為に今来てくれませんか？」

「え!? いまですか?」

「はい、今です! サイズが合わないといけなかったので、今お願いします! 今!」

「わかりました。じゃその服貰いますね。」

なんか、すごく強調されて言われた。へ? 確かに間に合わないといけなのは分かるが、なんでそんなに今じゃないとダメなのかい?

そう思いながらも、着替えようとブレザーを脱いでネクタイを外し、シャツの第一ボタン、第二ボタンを外した所で不味いことに気がついた。ここには女性がいたのを忘れていた。

「気が付かずにすみません。遅いとは思いますが、着替え終わるまで外で待つて貰えますか?」

そう言いながら、篠原さんが座っている方を見ると顔を両手で覆い隠していた。本当に裸を見せるまでに気がついて良かった。

「は、はい! そうします!」

そういつて駆け足で部屋を出ていった。彼女にはお見苦しいものを見せてしまった。

すごく申し訳ない。後で謝罪しなければ……

「着替え終わりましたよ。入ってきてください。」

「し、失礼しまーす……すごく似合ってます、本物の執事です！ 決まりすぎですよ。写真撮ってもいいですか？」

そんなに似合うのか？ あのお淑やかという言葉が似合う彼女がそんなにウキウキしているとは。そんなに似合うことはないと思うのだがここには鏡がない。だから一枚ぐらいは確認の為に撮ってもらおう。

「一枚だけですよ。」

「はい！ わかりました。」

で、スマホで撮られたなんの加工もないその写真はアニメで見るとような執事そのものだった。このまま大富豪の家に居ても可笑しくないぐらい決まっていた。

「サイズもピッタリですね。良かったです。けど、本当に似合いですよ。顔立ちは違いますけど、何処そのチエーンソーを指で止められるような執事の立ち姿とオーラを感じますよ。」

そんな物騒な執事に似ているとか、褒め言葉担っているどうかは怪しいけど、篠原さんもそんなウキウキしながら冗談とか言えるのか、いや、自分が見たことないだけだろ

うな。

「服は持ち帰ってください。当日現地で着替えてください。いちおう、更衣室で準備出来るみたいなので、忘れずに持ってきてくださいね。それでは、失礼します。」

「あ、待つてください。」

カバンに手をかけて立ち去ろうとする彼女は自分のその一言で足を止めこちらを向いた。

「当日の呼び方どうしますか？〈篠原さん〉だと不味いですよね。」

彼女は首を傾げながら、「まあ、そうですね」と答えた。

「お嬢。お嬢様。莉奈様。莉奈お嬢様。どれがいいですか？それとも違うものもいいですかね？」

そう自分が言った後、彼女の顔はみるみる赤くなっていきしまいには、頭から帯だたしい程の湯気が出ているような感じだった。

「え、あ、そ、その…お、お、お嬢様でお願いしまあー…す!!」

と言つて、ドアをボタンボタンと開け閉めし部室から飛び出て行つた。また悪い事をしてしまつたようだ。何が悪いかは、まあ何となくわかつたが、着替えの件と一緒に次会つた時には謝罪しなければ。

「よう、真澄。そういやさつき篠原さんがダッシュで過ぎ去つて行つたんだが、お前のせ

いじゃないよな。」

「自分もそう思いたかった。」

「お前何したんだよ。後、なんで執事服なんか着てんの？ いや、似合って入るけど、またどうして。」

「さつきまで色々あったんだよ。着替えるから待つてる。話はその後にしてくれ。」

唐突に部屋にはいつてきて、はなしかけてきたのは的井翼。まじいたずくバスケ部の1人で弱小チームと言われたうちのバスケ部を今年インターハイ準決勝まで押し上げた天才プレイヤー。自分も運動神経ではコイツには齒が立たない。いや、本当にマジでまあ、そのインターハイに代わりに出てくれないとバスケ部員に言われ、一緒に大会に出てからの仲だ。

俺は少なからず的井の事を友人とと思っている奴の1人だ。

で、着替え終わった後、自分は的井と向き合った。

「それで、ここに来たのは以来だろ。内容はなんだ？」

やれやれという顔をされながら的井は口を開いた。

「おう。けど、これは依頼じゃないんだ。まあーなんというか、そうだな、これは友人としての頼み事だな。本当に依頼じゃない。それを聞いてくれると助かる。」

おうふ、そう言われるとは思わなかった。だけど、的井の頼み事の内容は大体分かった。けど、確信が得られない。だから内容を聞くことにした。

「わかった。取り敢えず内容を聞いていいか。」

「わかった。じゃ、単刀直入に言うぞ、この部活に入れてくれ。真澄がここを一人でやろうとしているのはわかるが、それでも部員として迎え入れて欲しい。理由はいつか話す。ダメか？」

なるほど、やつぱりそうなんだろうとは思ってはいしたが、本人の口から聞くととても意外とも思える。けど、俺も同様の事を考えてた。部員を増やすなら先ず、的井を入れたいと。だから、答えは一択だ。

「答えを出す前に、自分も友人としてのお願いを聞いて欲しい。」

「な、なんだよ。お前が珍しい。」

「的井……この部活の部員になってくれ！」

的井はびつくりしたみたいだが、溜息を吐いて呆れた顔を見せた。その後笑いながらこつちを見た。

「お前なあ、ややこしい言い方するなよ。はあ、緊張して損したわ。後さ、翼なすくな、真澄」

「おう、頼むな翼。主に力仕事とか体力仕事を任せるかもしれないが大丈夫か？」

「おう、任せとけ。次期バスケット部エースの底力見せてやるぜ。けど、お前もやるんだよ

な。なんでも出来る化け物さん？」

「ああ、勿論。後、バケモン言うな。最近姉さんからもいわれたわ」

「だろうな。という事で入部届を貰いたいんだがここにあるか？」

「勿論あるさ。書き終わったら…」

自分が入部届を出して机の上に置いた時、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ。」

「失礼するね、真澄君。あ、依頼中だったかな？」

「いえ、大丈夫ですよ睦月先生。」

「じゃ、ここが学援部でいいって事だね。部員は君一人って聞いていたけど、彼は？依頼者じゃないんでしょ。」

「俺は1年C組、的井翼です。今日部員になりました。入部届は明日出します。」

「バスケット部の期待の新人くんか。君の評判聞いてるよ。けど、確信がバスケット部と掛け持ちになるけど、あちらの顧問はどう言ってるの？」

確かに掛け持ちになると翼の負担が大きくなったり大会の時どうするかを決めていなかったな。

「あ、はい。一応許可を貰えますし、試合1か月前は必ず出るように約束も付けました。今はオフシーズンなので来年まではこっちに來ます。後は、依頼にに応じて感じ

です。それでいいか？真澄。」

「勿論いいぞ。」

「うん、あちらの顧問が許可出てて、うちの部長もそう言っているなら、OKだよ。入部届は私に出してね。基本図書室にいるから。後、知っているとと思うけど、私の自己紹介。宮坂睦月みやさかむつきです。この部活の顧問になりました。あまり顔出せないかもしれないけど、二人とも宜しくね。」

「はい、宜しく願います。」

自分が挨拶した後二人で頭を下げた。

「机の上にある入部届貰っていくからな。じゃ、俺はこれで。また明日な。先生も失礼しました。」

「おう、またな」

「また明日ね。的井君」

そして、翼が出て行った後、先生はこちらに振り返ってきた。

「そうそう真澄君。この部活については生徒会長に色々聞いてはいるんだけど、今はどんな感じか聞きに来たんだよ。後顔合わせにもね。」

「そうですか。分かりました。今から大丈夫ですか？」

「うん、それじゃ、聞かせてもらうよ。仙道デパート社長、仙道雄也の弟。仙道真澄君。」

世間つてのは結構狭いもの

自分は底知れぬ怒りを感じていた。何故毎回あの野郎は大事なことを言わないのだろうか…

時は数時間前まで遡る

「誤魔化してもダメみたいです。何故本名を知ってるんですか、そして兄さんの名前も、教えろ。」

「ま、ままま、待って。確かにちよつとからかおうと言っただけなのに、ほんと待って。そんな怖い顔しないで。」

俺がどんなに表情をしているかは分からないが睦月先生は顔を真っ青にして怯えていた。

こつちとしては、そんな事を言われて、待てるほど冗談じゃ済まされないうことを言われている。なぜ知っているのか知らんけど答えるまで気を緩めないだろう。例え、兄さんの恋人だからと言われても俺は辞めないだろう。

「苗字ひとつで何を怒っているんだ、と思っただけでしょうが、こちらとしては信頼とか

そう言うのに関わる重要な事なんで、今すぐ話して下さい。さもなければ……」

「さもなければ、なんだ？真澄。俺の知り合いを尋問して刑事ごっこか？」

その声を聞いて俺の怒りも落ち着いた。は？友人？しかも何でここに

「何でここに居るんだよ兄さん。」

「はあ、あのな、むつつん。真澄がこうなるから本名で弄るなど言っただぞ……あの顔みて少しは反省したろ。今後はいいかもしれないが、真澄にとつて最初の好感度は最悪になっただろうな。」

うん。友人なのはわかったよ。呼び方とか絶対兄さんが普段使わない渾名で呼んでるしな。で、

「だからなんで、兄貴が居るんだよ!!」

「うわっ、いきなり大声出すなよ。びっくりするだろ。」

「びっくりしてるのはこっちだ。1から話してもらおうぞ！」

このブラコン兄貴は俺の大声にやれやれといった表情を浮かべながら、近場の椅子に腰をかけた。

「むつつん。元い、宮坂睦月がお前の事を知っているのは、俺が全部教えたからだ。何時もは口が堅くて誰にも言わない人なんだが、ここの顧問になったってメール貰ってまさ

か、と思つたらそのまさかだ。苗字の話もますみ本人の前ではするなつて言つて散々釘刺したのに結果はこうだ。」

「それはさつきの兄さんの話で、だいたい分かつてる。で、なんでここに来たんだ。俺を迎えに来たつて訳じゃ無さそうだし。」

「え!?!可愛い弟の部活を見学しちやダメ? むつつんも顧問だし、これで出入りしやすくなつたから。」

「聞いた自分が馬鹿だった。」

「まあそう落ち込むなつて、それも本心だけど、今回はむつつんを迎えに来た。」

へ? 迎えに来るつてどういう関係? 自分が不思議そうに首を傾げたの見たのか、睦月先生は口を開いた

「私とゆうくんはこの高校で知り合つたのそこからの仲。勿論、京も知り合いだよ。何時も3人で行動してたし、大学も皆同じ。2人は仙道の会社に行つたけど、私は母校で教師になつたつて訳。それで、今日は大切な日だから、君に挨拶にね。ゆうくんの兄弟に実際会うのは君と綾愛ちゃんだね。」

「そうなんですか、姉さんもご存知なんですね。」

「うん、結構仲良いよ。」

「そうですか、それで、今日が大切な日つてのは?」

自分がそう言うのと2人ともモジモジと身体を動かさず、徐々に赤面していた。その後先生が首元にかけてあるネックレスを自分にみせてきた。兄さんも手を甲をこちらに見せてきた。兄さんの手には今朝見た時にはないシルバーのリングが薬指にあった。睦月先生のネックレスにも同じものがあつた……

「兄さん。マジですか……」

「マジだ。今朝、婚姻届を出してきた。」

「親への挨拶とかは？」

「それはとつくに終わつてる。」

「俺ら兄弟には何も言わずにか？」

「それは済まない。本当に申し訳ない。」

自分は呆れた感情と同時に底知れぬ怒りが湧いてきた。

それで今に至る。何故重要な事をこの兄貴は伝えないのだろうか、これが1度や2度ではなく毎度なのだから、さすがに頭にくるのだ。

「兄さん。結婚を俺らに伝える気はあつたのか？」

「あつたさ。今週末のパーティーは結婚報告だから。ほら、見合い話とか結構来てたから、そういうのは金輪際つてことであつてというパーティーなんだけど、お前ら来ないじゃ

ん」

「何故！それを誘う時に言わないんだよ！言ったら姉さん達も飛んで来るってのバカなのかそれ、意味あんの!?!」

「サプライズって、いいなあって……」

「マジもんの馬鹿じゃん、もう呆れてなんも言えねえやクソ兄貴。サプライズっていうのは建前でホントはただのヘタレじゃないのか?」

馬鹿だのヘタレだのという事がグサツときたのか、兄貴は俺から嫌われたとも思い、シユンとして項垂れている。俺ら姉弟からの罵倒がこのブラコン兼シスコンには効くのだ。これで反省もするだろう。

睦月先生も慰めにまわっている。

「で、睦月先生はこんなブラコンで良いんですか?」

「うん、こういう所も結構好きなんだよ。私一人っ子だからね。君達兄弟の仲に入れて欲しいとも思ってるから、今日は挨拶にね。これからはお姉ちゃんって読んでいいんだよ。」

「それは遠慮します。呼ぶのは高校卒業後とかですかね。すみません。」

「う、ちよつとシヨック。」

「仕方がないと割り切って欲しいのですが。おい、クソ兄貴。今日これから空いてるよ

な？」

「空いてるが……」

「俺らを除け者にした罰だ。今日は姉妹の前に質問攻めされろ。いいよな、何も知らされないよりは知っている方がいいし姉さん達もちゃんと祝いたいだろうから。」

「わ、わかった。」

その後、睦月先生を連れ自宅に帰っただから自分達は、兄さんの婚姻話を姉さんと神鬼にして、兄さんと睦月先生はマシンガンのような質問攻めにあい、それを見た自分は怒りも飛ぶような爽快感を感じながら、その質問攻めを知らぬ顔をした。

今回は羽目を外して言わせてもらおう。ははっ、いい気分だ。

マシンガン質問攻めは終わったようで、リビングでは女子会が始まっていた。自分達は女子会が始まる前に兄さんと、リビングから追い出され自分達は兄さんの部屋に居た

「あと3ヶ月で、この部屋ともおさらばだなあ。真澄、今日はありがとな。妹達のうれしそうなお顔を久々に見れたわ。」

「感謝される事はしてない。自分がしたい事をしただけ。お陰で兄さんのタジタジした所を見れた訳だし。」

「すみませんでした。」

「よろしい、とは言つてもまだ納得いつてないからな。兄さんに恋人がいてしかも結婚までするとか、夢かと思つた。」

実際そうだ。女性の1文字もなく、俺たちの面倒、大人になつては会社の引き継ぎや仕事に追われてたあの兄さんが、結婚するとは思わないのだ。多分姉さんも神鬼も思つてないだろう。

兄さんも自分のその一言で笑いだして、その後一息ついた。

「確かにそうかもな。そりやお前達には隠し通してたからな。けど、お前もあの質問攻めで聞いた通り、その夢と思われる中で、むつつんを好きになつて恋人になつて、それから長い年月を掛けて喧嘩したり、笑いあつたりで、今の形なんだ。なんか先に幸せになつて悪いな。」

「別にいいだろ。長男が先に幸せになつちやダメなんて事はないだろ。けど、先に幸せ掴むのは姉さんかと思つた。結婚まで秒読みつぽいし。」

「確かにそれもあるけど、お前、大丈夫か。あれから2年経つが、まだ許せないのか、自分自身が。」

「勿論。自分が未熟なせいで起こつたんだ。だから、その人から許されるまでは。つてやめようぜ、せつかくの幸せムードが台無しになる。」

しんみりした雰囲気を変えたい自分は、寝るまで兄さんの惚気話を濃いめのブラックコーヒーと共に聞くのだった。勿論、その日は寝むれなくなりオールをしてしまふというオチをつけて。

あの花の花言葉は。

今週の登校も終わっての土曜日、この日も依頼は入っていて、休みのない日々が続いているのである。

今日は料理研究部の依頼で、集合場所は「SOLL」というパン屋らしい。知らない自分は、何故か場所を知っているという翼と近くの駅前集合し向かうことにした。

「で、なんで翼がパン屋の事知ってるんだ？何度か行ったことがあるとかか？」

「何度も言ったことがあるも何も、家の近くだ。後、この依頼俺も行く必要があるのか？あまり乗り気がしない。」

「部員になったんだ、後、あっちの部長さんからもご指名だから、仕方ないと割り切つて欲しい。」

翼が来てから、うちの部への依頼が多くなった。特に女性からの恋愛相談が多くなった。男の俺から見てもコイツは格好良い。話によれば料理以外はなんでも出来るようだ。スポーツマンなのにそう言う家庭的な所も好印象なのだろう。故に、的井翼はモテるのだ。だがしかし、何故料理のできないコイツにご指名の依頼が来るのか知る由もないが、とりあえず、連れていかない訳には行かないのだ。なんでかって？

そりゃ勿論、依頼だから。

そんな足取りの重い翼の後ろを着いていき、たどり着いたパン屋【SOL】は住宅街にに使わぬ煉瓦で建てられたいかにもパン屋って感じの建物だ。

「此処か、ん？CLOSEか。閉まつてるみたいだけど、入っていいのかな？」
「……やっぱり俺は帰る。」

そう言つて、パン屋の隣の家に向かつていった。ここまで来たんだ。絶対に返さん。自分は、翼の腕を掴みその歩みを止めさせた。

「此処まで来て怖気づいたのか？他人の家に避難したいくらいダメみたいなのは分かるが、これも依頼なんだ、我慢してくれ……」

「や、やめろ！HA☆NA☆SE!!後、他人の家じゃねえ！正真正銘俺の……」

翼が何か言いかけた時、「SOL」の扉を誰か開けたようだ。出てきた方は女性で身長は160程度、黒髪で長さは肩まであり、後ろ髪は束ねられてる。お店の人なのかエプロンと三角巾をつけた。

「すみません。今日は臨時休業なんですよ……つて、たつくん？なんでお店の前で騒いでるの？あ、隣の人はお友達？」

「ち、違う！いや、こいつが友達なのは合ってるんだけど、別に騒いでるわけじゃない。」

「あ、そうなんだ。初めまして、ゆずきゆの柚木唯乃です。そこに居るたつくんの幼馴染です。」

「は、初めまして柚木さん。自分は不動真澄です。」

「え？不動くん？あの、学援部で今日お手伝いに来てもらう、あの不動くんですか！」
「そ、そうですけど。」

自分のことが、学援部の人とわかったみたいで、目をキラキラさせながら、自分の顔を覗き込んできた。う、あ、圧が凄い。そして後ろの翼からなんか痛い目で見られている。何故なんだ。

2人からの視線を受けていると、中から料研部の部長が顔を出してきた。

「真澄くん。なんや来とったんか、ほれほれ、はよ入って手伝ってきな。」

「あ、はい。お邪魔します。柚木さん。」

「うん、どうぞー。たつくんはどうする？一緒にうちに来る？」

翼に来て欲しそうにその目を向けている柚木さん。翼も幼馴染のそんな顔を見たのか、さっきの帰る雰囲気も失せたみたいだ。

「わかった、久々にお邪魔する。けど、ゆつくりするんじゃないやなくて、俺も学援部に入ったんだ、ちゃんと手伝う。」

「そうなんだ！じゃあよろしく頼むねっ、たつくん。」

心無しか嬉しそうな柚木さん。そんな嬉しそうな顔を見て、優しく笑いかける翼。な
んやかんや言って幼馴染なんだろうな。

そんな景色を自分と部長さんと見てたら、部長さんがニヤニヤしながら自分に話してきた。

「なあ、うちの井君を呼んだ理由がわかったやろ。」

ふふつと笑う部長さん。いやわからねえつすよ。

「人手不足って事じゃ無いんですか？てつきりそれだけだと思ってたんですけど。」

「はあ、不動くんも大概やわ。まあ、君はそれがええかもしれへんけど。まあ、今日はよろしゅうな。」

複雑な気持ちを抱えながら、自分はお店に入るのであった。

今回の依頼内容は、明日行われる近くの保育園で行われるバザーに出すクッキー作りの手伝い。ではなくて、完成したクッキーを袋詰めする作業だった。保育園でのバザーに出るのは料理研究部の伝統のようで、売上金も半額、保育園に寄付しているらしい。毎年、料研の手作りクッキーは大好評の大人気みたいで、今日も大量のクッキーが作られるみたいだ。袋詰めするだけでも深夜に突入しそうな量だ。そりゃ、自分らに依頼をしてくるわけだ。

自分達は、会話もなく黙々と作業を続けていた。まあ、終わりが見えない。手

を動かすしかないぐらい、大量に作らないと行けないみたいだ。けど、自分の中で引っかけた部分を翼に聞くことにした。

「なあ、柚木さんに遮られたが、正真正銘の後なんて言おうとしたんだ？」

集中してたのか、俺が話しかけるとはっと顔を上げ自分の方に向いた。

「ああ、このパン屋の隣、お前が他人の家と言っていたのが俺の家だ。ユノの幼馴染っていう話もそう、昔はよく一緒にいたんだけど、中学上がってから俺の部活も忙しくなったりして、それから会う時に挨拶を交わすぐらいになったからな。」

「で、なんで来たくなかったんだよ。」

「そりゃ、久々すぎて緊張したんだよ！成長したんだから、あの頃みたいには行かないだろ！だからだよ。後、あだ名で言われると思って正直恥ずかしくなった…」

そんな弱々しい語尾を残しながらこの会話は終わった。静寂に包まれたこの空間とは違い、調理場からはワイワイと料研部員たちの声が聞こえて来るだけだった。ピーツと音がなった後、誰が運ぶか口論になったあと、柔らかな笑い声が聞こえた。どうやら誰か決まったようだ。

「おまたせ。次のクツキーで来たよよよっわあ！」

柚木さんが運んできたのだが、足が絡まってしまい躓いてしまった。焼きたてのクツ

キーが乗った鉄板ごと持ってきていた為、その鉄板とクッキーが宙を舞う。危ない。俺が動くよりも早く隣の翼が動いていた。

「っ！唯乃!!」

柚木さんの上に鉄板が落ちてくる前に、翼は躓いた彼女を支えて、落ちてきた熱々のものを手で払い除けた。その払い除けた鉄板は自分の方へ向かってきて……向かってきて!!

自分は咄嗟に躲した。危ねえ

「大丈夫か、ユノ。怪我不いか。」

「うん、大丈夫だから」

2人はお互いの顔みて目と目を見つめて……

10秒。男女が10秒見つめ合うと恋に落ちると言うが、お互いが顔を赤らめ咄嗟に離れた。

「ごめん、大丈夫なら良いんだ。」

そんな事をタスクは言いながら払い除けた手をサツと後ろに隠した。それに柚木さんも気づいたのかその手を取って、心配そうな顔をした。

「心配すんな。火傷はしてない、ただ熱かっただけだ。」

「けど、バスケする為には大事な手じゃん！すぐに冷やして、水道はこっち。」

柚木さんに手を引かれ翼は調理場に連れてかれた。調理場に入る前に翼は、ほうつと溜息を吐いた。あの溜息は何度も聞いたことがある。あきれた時でも、イライラした時でもない。あれは依頼者達が生きてきた。青春の溜息だろう。

翼が調理場に入ると同時に、部長さんが入れ替わりでこつちに来た。

「クッキー。派手に巻き散らかしましたなあ、片付け、手伝いしましょうか？」
「はい、お願いします。」

床に落ちた。甘く、良い香りのする物を片付け始めた。多分甘いのは匂いたけではなく、雰囲気もそれとなく甘い物を感じた。部長もその雰囲気に気づいたのか、部長は自分に話しかけてきた。

「このパン屋さんの名前、太陽って意味ともう一つ、唯乃ちゃんの苗字に関連する意味があるんやけど、不動くん、わかるかえ？」

「いや、直ぐにはわからないですね。」

「ヒント、さっきの2人にお似合いな、特に、さっきの井くんにはピッタリやねえ。」
ふふふつと笑った後、再び掃除に取り掛かったのだ。

柚木↓柚↓柚子、青春を感じるような溜息、「SOL」、2人の咄嗟の慌てた反応。なるほどわかった。2人とも無自覚だけど恋をしている。そして、柚の花言葉。

【S i g h o f L o v e】恋のため息
確かにあの二人にはとつてもお似合いだ。

彼、かれ、カレ

今日はパーティー当日。私は、集合場所に一人座っていました。時刻は17時20分、集合時間には10分早いですが、待たせるのも悪いので早めに来てしまいました。彼に会うのはこれで3度目、依頼した時に2回今日は3回目。ほんの数回しか顔を合せてないのに、私は何回も何十回も会っている気がする。

私はスマホで写真の中のアルバムを開く、その写真には私は写っておらず、彼と、所々に似ている女性のツーショットが映し出された。この写真で私は幾度も彼の顔も見ただ。実際にあつた時も変わらぬ顔をしていた。けど、雰囲気だけが違った。

不思議とは思わなかったし、当然といえば当然だろう。写真の中と彼は心から笑っている。楽しそうに見える。けど、本当の彼は顔色一つ変えずに淡々としていた。

私は写真に移る彼女から教えてくれたような彼の笑顔が見たいだけ、だから、今回の依頼を持ちかけた。勿論、この学校に彼が居るとは思わなかった。けど、実際に居ただ。

運命とか偶然とかそんな事今はどうだっていい。今は彼の笑顔を見ればそれだけ

で、彼女が楽しそうに私に話してくれた。彼の笑顔を……

「お待たせしました篠原さん。」

集合時間10分前、自分は指定の場所に到着したが案の定篠原さんは先に来ていて、待たせてしまう形になってしまった。

「いえいえ、そんなに待ってませんよ。」

「しかし、ドレス姿ですよ。上に羽織っているとはいえ、寒くありませんか?」

「いえ、不動さんが来る2分前ぐらいに私も着きましたから、そんなに冷えてはないトクシユン」

そんな可愛らしいくしゃみをする篠原さん。多分2分前とは嘘でその前から外に居たのだろうか。

11月下旬。夕方にもなれば冬並みに寒くなる。カクテルドレスにウールジャケットの服装だと五分でも体が冷えてしまうだろう。自分が早く来る事を考えて、防寒もそれほどしていたかったのだろう。本当に申し訳ない。

自分は、来ていたトレンチコート彼女の肩にかける。すると篠原さんは驚いたようにこちらを見る。

「びつくりさせてすみません。待たせたお詫び……にはなりません、タクシー捕まえる

まで着ておいてください。」

「え？でも、そうすると不動さんが風邪ひちやいますよ!？」

「そうなたらその時です。じゃ早く行きましよう。」

自分は篠原さんの手を引き、タクシー乗り場に目指した。

無事タクシーに乗り込み、目的である。仙道の本社ビルに向かう。

「君たちはデートかなにかかな？にしては、あの仙道株式会社に用があるなんて思えな
いけどねえ。」

目的地に向かう途中、運転手がそんな事を尋ねてきた。確かに、ドレス姿の篠原さんと普段着で大荷物を持っている自分が一緒に乗り込んで、有名会社の本社ビルに向かうんだ。とても変に思うだろう。

「デートでは無いですけど、彼は仲のいい友人です。今日はパーティのお誘いを受けましたので。彼は私の付き添いです。」

「はあ、そうですかい。」

それから運転手と篠原さんの話が続いた。

それにしても、友人か……

お世辞であつてもそう思われるのは嬉しいものだ。自分だつて一般的な男子高校生だ。高嶺の花である篠原さんに言われるんだからそりゃ気分も上がつてしまうものだ。

自分じやなきや勘違いするだろうし、その場で発狂する奴も出るだろうな。うん。

にしても、篠原さんと後部座席に隣同士普通に座っているが、良かったのだろうか別々に座ればきつとこういう勘違いもされなかつたであろうに、すみません篠原さん。

そう思いながら彼女の横顔をちらつと横目に見る。なんだか既視感のあるその横顔は誰かに似てるような……似ていないような。

まあ、自分の気の所為だろう。とそんな事を考えていると、目的地に到着したのであつた。

タクシーから降りた後、不動くんは執事服に着替える為更衣室に行つた。

更衣室の場所を聞く為には受付の方に場所を訪ねたものの、彼は一度聞いただけで、まるで何処にあるか最初からわかつているかの如くすんなりと向かつた。

彼は多分隠したがっているとと思うが、彼がここの現社長の弟である事は私は知っている。何故かと言うと、その現社長さんから話を聞いたから。彼が私と同じ学校にいるという事を教えてくれたのも社長さんでした。

教えてくれた理由は色々あるとは思いますが、社長さんからは、

『多分あいつが欲しいものは君が持つてそう。』

と、一言言われました。彼が欲しいものつて一体なんでしょう？彼に対しては知りたいことだらけです……

消して、彼が好きという訳では無いですけど………

多分、篠原さんが不思議に思う事もなく、更衣室に向かう事が出来ただろう。

少しの不安はあるが、そう思いながら、迷わずに自分は更衣室に着いたのだが扉の目の前に見知った人物がいた。

「よっ、久々だな。澄。」

「久々だね、京介さん。兄さんの面倒を見てくれていつもありがとう。」

「あく仕事ではしつかりしてくれるのに、帰れないとわかった時点で、弟よく妹達よくいつも嘆いてうるさいからな。まあそこら辺に關しては慣れた。」

「本当にあのバカ兄貴がすみません。」

「いや、退屈しなくていいぐらいだから。そんな事より、着替えな。」

そう言つて自分たちは更衣室に行った。

彼の名前は葵咲京介。兄さんの親友で今は兄さんの秘書を務めている。

京介さんは自分からしたら2人目の兄のような人で、姉さんの恋人……というかもう許嫁まである。そんな人だ。

そんな着替えている間、他愛のない話に花を咲かしている。

「兄さんが結婚するなんて、京介さんは驚かなかったんだよね？」

「ん？ああ、そりやアイツらとはカレコレ10年以上の付き合いだからな。雄也に関してはそれ以上だし。付き合っていたのは知っていたし……寧ろ、相談とか、婚姻書の証人にもなったしな。」

「まあ、そうだよな。1番知っているのは京介さんだもんな。」

「まあ、年の離れたお前達には見せない顔も多いのは確かだが、多分俺より宮坂の方が知っているだろうな。」

「それもそうか。にしても、幸せを掴むのは、京介さんが先かと思っていたけど？」

それを聞いて京介さんは苦笑いをした。

多分、お互い忙しくて、直接話し合うことも少ないだろう。

「いや、指輪はかつてあるんだけど……なかなか予定も合わないし、デートも行けてないし……もう、結婚するなという暗示なんじゃないのかと思うぐらい嘯み合わねーんだわ。」

そう言つて盛大なため息をつき、肩と気分を大いにおとした。

「そういや、姉さんが『ムードとか関係ないから早く貰つてよ』だつてさ……全くどれだ
け京介さんに心酔してる事やら。あと、うちの家の人間は誰一人反対しないから。」

姉さんの言伝を聞いたあと京介さんは背筋がピンと伸びた。

「なるべく早くそうするわ。」

「うちの姉をお願いします。」

この反応だと、明日にでもプロポーズするんじゃないのかな？まあ、人の好き嫌い感
情はあまり分らないけど、家族が幸せになるのなら、素敵な話だ。

そう思いながら、自分は執事服の最後のボタンをとめた。

「へく結構似合つてるじゃん。俺はいいと思うぞ澄。」

「そりゃ、お世辞でもありがたいつすよ。」

さて、お仕事の時間だ。

詮索と覚悟と遂行

「お嬢様、お待たせ致しました。」

会場ホール前で待たせていた篠原さんに、挨拶をする。完全に仕事モードの自分をクラスメイトに見せるのはあまりないので、篠原さんも驚いている。

「え、あはい。では行きましょうか。」

先に歩く篠原さんの後を自分が歩き、そのまま会場に入る。

すると、それに気づいたのか知らぬ男性がこちらに向け、手を振ってくる。それに応じて篠原さんも手を振り返し、その男性の所へと向かった。勿論俺もその後を着いていく。

「うん、よく似合ってるよ莉奈。」

「ありがとうお父さん。」

細身で身長は大体180と言ったところ、顔には黒縁のメガネをかけたこの男性は、どうやら篠原さんの父親みたいだ。

こうして親と会話を交わしているところ親子仲はそれなりに良いみたいだな。微笑ましい光景だから

そんな光景を見ていた俺に気づいたのか、篠原父は俺の手を取り握手をしてきた。

「君が真澄君だね！始めまして二条製薬社代表取締役社長で莉奈の父、二条御陰だ。君のことはこの社長であるお兄さんから良く聞いているよ。自分と同じぐらいできた弟で本当に頼りになるってべた褒めしてたよ。」

おい、そんなふうに言うなよ兄貴。これじゃ俺が完璧超人と同じと言われているんだが、どうしてくれようこの怒り。

とはいえ、嬉しそうに握った手をブンブンと振ってくれる御陰さんの裏表のない表情は、何処と無く癒されるし、この人の気持ちには答えたくなくなってしまふような、そんな気分にする。この雰囲気は多分親子同じだなと思ってしまう。

「こちらこそ、改めまして不動真澄と言います。今日一日は旦那様とお呼びしますが宜しいですか！」

その一言によろやく手を離してくれた御陰さん。そして、考える間もなく、即答する。「旦那様……いいねえ！そう呼んでくれ。」

「では、よろしくお願ひします旦那様。不束者で、今日あつただけでは信頼には至らないとはお思ひですが、お嬢様の事はお任せ下さい。」

「うん、君なら任せられるよ。よろしく頼む。それじゃ、楽しんできてね。莉奈、不動くん。」

「またね、お父さん。」

そう言つて、別の場所に向かつていった。

後もう一度言つておく、これでいいのか篠原家!! 兄がそう言つたからと言つてそんなに他人を信用してもいいのか? 一応、思春期真っ盛りの男子高校生だぞ! 娘さんをそんな自分に任せるとかどうかしてる!

「今不動さん、自分にそんな信頼を置いてもいいのかと思つているよね。」

「は! ええ、なぜ分かつたのですか?」

「顔に出ていますよ。今のは私でもわかり易かつたです。けど、あんな感じでも、父は人を見る目がピカイチなんです。多分、不動さんの立ち振る舞いとかで、すぐにでも見極めたんじゃないんですかね?」

なるほど: 人を見極める力なのか。それにしてもピカイチとはいえ、大きな博打でもある。これが信頼した人で、その信頼をぶち壊す人だとすれば、大きな損害を得ることにもなる。それを瞬時に判断する力はさすが社長の技量といったところか? 多分うちの雄也兄さんでも無理だろう。

「では、私は認められたということになるのですかね?」

「そうかも、そのうち、うちの会社にとってスカウトとかされるかもしれませんね。下手したら、婿養子になって……それは私も困りますけど。」

「確かに、流石にそれは私も困ります。」

お互いにくふつと笑い合う。彼女と接点がなく話した事も無いため、初めは不安だったものの、話を始めればそれなりにキャッチボールができていて心底安心した。

自分だって年頃の男の子だ、こうやって女性と話すだけで少しは胸が高鳴る。更には、学校でファンクラブができるほどの文武両道の美女である。少しは何かあるんじゃないかと期待をしてしまう。

そんな期待を隠そうと決心した矢先、とんでもないやつが近付いてきたのがわかった。

「真澄いいいいいい!!」

「フンッ!!」

自分を見つけるなり、走ってきたブラコンを思いつきりローキックした。ローキックは見事、兄貴の尻を捉え、兄貴はそのまま地面にうつ伏せ状態となった。

地面にうつ伏せになるこのパーティーの主役、それを見て慌てる篠原さん、そして、溜息を着く自分。そんなところに、歩いてくる。宮坂先生と京介さん。

「だから、言つたる雄也。今の真澄は仕事モードだ、そんな事すると痛い目に見ると知っ

ててやっているのはわかるがもう少し、弟の気持ちを考えてやれよ。」

「だとしてもよオ京介、こうやって俺が主催のパーティーに来てくれる事がとても嬉しいんだよ。これであと2人も来てくれたら良かったのだが……つとお、失礼したね莉奈ちゃん。」

「い、いえいえ、えー、だ、大丈夫なんですか?」

あわあわと心配する今日限りのご主人様。

「大丈夫大丈夫! 寧ろこうやって仕事してるのにも関わらず構ってくれることの喜びの方が勝っているから。」

何かわかっていないような感じで首を傾げる篠原さん。ここは何もわからなくてもいいんだよ。その人が特殊なだけだから。

「にしても、久々だね。莉奈ちゃん元気にしてたかい?」

「はい。雄也様もご結婚おめでとうございます。」

「ん、ありがとう。という事で紹介するよ。妻の睦月だ。」

そう言って隣に来ていた女性。基、自分の部活の顧問である宮坂先生を紹介した。

「……!? み、宮坂先生?!?!」

「ふふつ、金曜日ぶりだね、莉奈さん。まさかこんなところで会えるとは思わなかったよ。」

そうやって今日この場所に来ている理由を説明する篠原さん。最初すごい顔で驚いていたとはいえ、すぐに切り替えて淡々と話していく。その話を聞いて静かに相槌をする先生。

「なるほどね、わかった。じゃあ学校では内緒でいいのね。」

「はい、秘密ごとになってしまえますがよろしくお願いします。」

「いいの、いいの。私からしたら秘密が増えただけだからね。スミ君。」

「確かに貴方は義姉ではありませんが、その呼び方はやめていただきたいです。」

ケチーと口を尖らす睦月さん。あのスミ君という呼ばれ方はなんというかむず痒いし気持ち悪い。なるべく控えて頂きたい。特に学校とかでは。

そんなやり取りをした際、横でソワソワし始めた。篠原さん一体どうしたのだろうか？

「お嬢様。どうされました？」

「あ、あの。そういうえば私勝手に不動さんの家庭事情とかを知ってしまったんですが、不動さんは大丈夫だったりするんですか？」

「どこまで知っているかには寄りますけど。」

「あ、そんなに深くまでは。兄弟は4人で兄が仙道グループの社長で私と同じで苗字を変えているってことぐらいですよ。本当にそのぐらいです。」

アワアワしているが話しぶりからしたらそこまでしかならないだろう。多分、兄さんもそこまでしか話してないみたいだろうから、俺からしても気にするほどでもないな。

「馬鹿な兄貴がやった事ですし、それだけなのであれば、内緒にしていただければ私は何も言いませんよ。」

「そうですか。なんかホツとしました。」

そう言つて胸を撫で下ろす篠原さん。秘密を抱えてちよつと緊張気味だったのかと振り返ればそう思えるところがある。

「それでは私は席を外しますね。」

多分御手洗であろう。しかし、こういつた時つて傍付きは着いて言つていいのだろうか？いや、勿論中に入らないし、入口で待ち伏せという訳にもいかないだろう。

んーつと難しく考えていると、篠原さんが俺の裾をちよいちよいと引つ張つてきた。

「会場の入口で待つていただければ……」

お、おう、バレバレでしたかね。

「わかりました。ではお待ちしております。」

「では、雄也様、宮坂先生。また後ほど。」

そして、篠原さんはお花をつみに、自分は会場入口では待機となつた。

御手洗を済ませて、私は洗面台にいた。

「とりあえず、良かった。」

不動くんのお兄さんが不動くんの家庭事情を少し話していた事だけれど、本人はそれを知られていてどう思っているか心配だった。

多分、お父さんの話を聞いた時から気づいていたとは思う、けれど、その場で追求してこなかったという事は広まらなければ良いと思っっているのだろう。そして、私が彼の事情を話すような人ってわかっっていて……

「不動くんも見る目あるよ。」

お父さんほどではない、けど人を見る目はそれなりにある。

彼のお兄さんである。雄也さんや、学校で依頼を受けた先生達が好評する人間ではあるなあと感じるし、人当たりもいい。

けど、私が昔写真の少女から聞いた話とは違った。

「寧ろ、真反対だよ。」

優しい所は変わらない……けど、基本喧嘩好き、一人称は俺、勉強はできるのに何故かグレしているとか、よく少女漫画に出てくるような優男系ヤンキーみたいな印象をして

いたというか、もはやそうらしいです。

しかし、初めて会った時には驚いた。高校生デビューしたかのごとく180度変わっていたて、そして今の彼である。

分らないことも多いが、今と前の彼が違う事だけはわかった。

「とりあえず、戻ろう。」

洗い終わった手をハンカチで拭き取り、御手洗から出た入口に誰か立っていた。

「お嬢ちゃん可愛いねえ。このパーティーもつまらないし、2人で一緒に抜け出さない？」

「いえ、私は楽しんでますので…」

さらりと出た言葉。嘘のようで嘘じやない。

いつもは何も思わなかった社交パーティーだが、今回は楽しいと心から思っている。

「えー。でも、若い人も俺らだけだしね。大人達の仕事話やのご機嫌取りのような会話も疲れるでしょ？だからさ、外に出て空気でも吸いに行かない？」

「私待たせている人がいるので、失礼します。」

そう言つて、知らぬナンパ師の横を通り過ぎた瞬間、私の腕を取られる。そしてそのまま壁際に追いやられた。

「やめて！はなして！」

握られた腕には多少の力が込められ逃げる事が出来ない、顔は近づいてくる。

嫌だ、怖い、怖い怖い、反論したいのに声も出ない。何かが私の声を遮ってしまう。

怖気づいてそのまま流されてしまいそうになった時。ナンパ師が私の手をつかんでいる手首にもうひとつの手が現れた。

「お嬢様から離れてください。この下衆。」

入口で待っていれば、篠原さんのような声で離せと聞こえてきたから向かってみれば、見るからにチャラ男に迫られていた。

見るからに顔が近く、このままだと唇を奪われてしまうところみたいだったな。早めにあの声に気づいてよかった。

自分が手首を掴んでいる相手はこちらをずっと睨んできている。邪魔されたのがご立腹なのであろうが、こちとら信用問題に関わるんでな。その掴んだ手首に力を込める。

「何邪魔してんだよ!!ア、ア!!その手を離せよ!いい雰囲気だったろ!!」

「貴方様は脳が沸いておらっしゃるようですね。嫌がる女性に無理矢理迫って何処がい

い雰囲気なのでしょうか？その汚い手でお嬢様に触れるな…とつとと離せ。」

自分はさらに力を込める。するとチャラ男は痛がり、篠原さんの腕を話した。

つかまれた腕が離れた篠原さんはすぐさまここから距離を取った。それを確認した自分は掴んだ手首を離して安堵の溜息をついた。

その瞬間、顔に痛みが走り、右を強制的に向けてしまう。

「人の恋路を邪魔しやがって、殴らせろ。」

どうやら、俺は殴られたようだ。口から血は出てないものの、それなりの痛みが俺を襲う。とは言っても数回だけの喧嘩慣れした拳だろう。力任せで踏み込みが甘いのでそこまででは無いただの見掛け倒し左フックだ。

「ムカついたら手を出してくるとは…ほんとうにこの会場にお呼ばれされた方なんですか？ただのチンピラにしかお見受け出来ないのですが？」

さらに挑発する。先ずは名前とどここの会社か聞き出しておきたい。今後の兄さんの仕事に影響が出さない為にも…

「はあ？お前何言ってるの？俺の会社知らないのか？」

はっ、つと笑い飛ばすし、そんな事も知らないのか？と言わんばかりの顔をこちらに向けている。

腹は立つが流石に苛立ちはまだ押え冷静を保つ。

「すみません。失礼なお話、貴方様のような人望がなさそうな人、こういった所ではみかけませんので……すみませんねえ。」

「オイオイ、本当に知らねーのかよ……ウチの会社はエーユー製薬の江雪誠也の息子、江雪誠也だぞ、覚えておけ！」

「エーユー製薬の息子様でしたか、それは失礼致しました。まさか、そんな方がタダの能無しで、威厳なしとは思いもありませんでしたので……申し訳ありません。」

エーユー製薬は日本シエアでもTOPの会社でその江雪誠也さんはウチの親ともそれなりにいい関係を築いていたのは知っていたし、息子がうつけ者と言うのは聞いていたが、まさかこいつだとはな……

「という事でよろしく頼むよっ！」

そう言つて、このうつけ物は、近づいてきて右ストレートをかましてくるが、自分はその拳をさらにと躲し、その反動を利用して思いつきり距離を取った。

「お嬢様。仙道様とその秘書である葵咲様を呼んできてください。お嬢様にお願ひするのは心苦しいのですが、お願いできませんか？」

「わ、わかつた……」

「本当にすみません、それと上着を預かつて頂けませんか？」

差し出した執事の上着を篠原さんに差し出す。すると、彼女は無断で受け取り、その

場を後にした。とりあえずこれで時間は稼げるかな？

「何逃がしてんだよ！ありや俺の獲物だ。カツコつけてんじゃねーぞ！ああ！」

テンプレートなセリフと似合いもしないメンチをきる江雪。

自分はそんなのセリフに面と向き合うことにした。

「貴様のような親の権力を自分のように使う人間は嫌いだな。どうせ今まで失敗したことないんだろ？親の金とその権力とかで女ども従えてきたみたいなやり口っぽいな。」

「なあっ！」

全て相手を焚き付ける為のブラフだったのだがまさか当たりだったとは…

「ハハッ、思ったより最低で良かった……」

「それがどうした？」

そう言って、殴りかかってくる江雪誠次。

自分は江雪からの暴力をサンドバッグのように受けるが、急所へ攻撃は回避しそれ以外は全て自分のみに受ける。

自分でもDMの所業かな？と思う程のものだか、消してそうでは無い。

「大口叩いた割には、お前しよばいよな!!」

間髪入れずに、拳や蹴りをかましてくる。

「お前が、邪魔するから、殴られっ！てんだ、よっ！」

「許しを乞うまで、やめねー、からよっ！」

相手も相当頭に来ていたのだろう。にしてもたった少しの挑発だけでこんなにもなるとは……今後は気をつけた方がいいか？

そうやって、今後の対処法を考えたながら急所を避け続けて5分も立たないうちに物は自分の考えた通りになる。

「真澄ツ！って……あいつ何やってんだ？」

「やべっ！」

誰かが来たのを知って、逃げ出しそうになる江雪誠次だが、自分は攻撃を受けたそのヨレヨレの体を使い、江雪を羽交い締めにする。

そして、兄貴と京介さんがこちらに駆けつけてきてくれた。後ろには篠原さんもいる……とりあえず、そんなに時間がかからなくてよかった。

「不動さんっ！」

相手の攻撃を受けてヨレヨレになった俺を見て、心配そうな声を出す篠原さん。それに対して、安心しきっているこの会社の2人。

「雄也様、京介さん。エーユー製薬で江雪誠也もしくはその息子である江雪誠次の出席は確認されていますか？」

「京介。」

「はい、社長。」

そう言つて、こうなつてゐることを知つてか知らずか、出席名簿を確認する京介さん。すると、すぐ出てきたみたくて兄貴と確認する。

「真澄。誠也代表取締役社長は来てないが、名簿の方に江雪誠次の名はあつた。後、彼は当日記入の方ではなく、招待者記入欄の方に入つてゐるからな。」

一応招待者の方で来ているのを確認できた、勘違いせずに、殴り返さなくて良かったわ。こいつは屑でも、江雪社長とのイザコザは不味いからな。

「では、京介さん。エーユー製薬の代表取締役社長様にご連絡お願いします。もしグファツ！アア！」

羽交い締めにしてゐた江雪誠次が、大人しくしてゐたと思いきや、肘打ちが繰り出される。

油断してゐた自分はお腹にモロに直撃し、羽交い締めが緩む。その隙に逃げ出す誠次。

「油断したな、間抜けがア！」

そう言つて、蹲つた自分を思い切り蹴り、距離をとる誠次。

咄嗟の事で防御も出来ず、そのまま横脇に蹴りが当たる。素人の蹴りでも流石に痛

い、立ち上がるのにも時間がかかる。

「俺の事そつちのけで、訳分かんねー世話やがって！ああ！こつちは大企業の御曹司だぞ、そんな俺をこんな扱いしやがって……」

自分はよろよろと何とか立ち上がりながら、その言葉を聞く。

こちらが挑発したこともあり、自業自得とは言わないにしろ、流星に馬鹿みたいなこととで起こっている。

あいつにそんな、人に何かを従わす権力などない。全て、彼の父親の力である。そんな力を我がものかのように扱っているのが間違いなのだ。

「だから、どうした。たかが御曹司だろう？お前がその会社やこの社会において、どんな権力を持つとが、世間では通用しないんだよ。だからお前はほんほんだけのおぼっちゃまなんだよ……」

この中でただ一人、アイツにだけ効く言葉……

いや、若しかしたら、俺にも跳ね返ってくるかもしれないそんな言葉は、この場を静寂に包む。

「……ぶつ殺す。てめえだけはぶつ殺す!!」

さっきの言葉で怒りが頂点に達したのだろうか誠次はポケットから鉄塊を取り出しそれを器用に回し、刃物を出現させる。手に持っているのはバタフライナイフのよう

だ。

「俺を殺す？ハハツ。どうぞ、好きに？」

「殺すううあああああ!!」

怒り任せにこちらに向かつてくる誠次。

自分は怖気付く事無くこのボロボロの身体で構える。

これまで暴行を受けてきたのだ、拳の一発や二発かまさねば、こちらの気が晴れることもないし、それぐらいだったら正当防衛にもなるだろう。自分がナイフを持っている相手に対して、それをかわして無力化出来ることを兄さんや京介さんは知っている。だから、誰も俺の前に飛び出さないと思っていた。

そう思った瞬間、誰かが、自分の前に立ち塞がる。篠原さんが、俺が出るという事。それを知る良しもなかった事をたった今、この瞬間に思い出した。

篠原さんは誠次に背を向け立ち塞がる。その全身は震えていて、目を瞑り覚悟をしていたようだ。

「バツカ!!」

前に立ち塞がる篠原さんをすぐさま抱き留め。『俺』は篠原さんごとしやがみながら向かってくるクズ野郎に足払いをする。

足払いは見事命中してその場に思いつきり足を取られ倒れるクズ。

「兄貴ッ!!」

俺はクズ野郎が起き上がる前に兄貴に向かって叫ぶが、叫んでいた時には、クズ野郎の方に向かってきてきており、彼を無力化してくれていた。

「大丈夫!怪我はないか!?!、無理矢理引つ張つたから、筋とか傷めてないか!?!足首は!?捻つたりしてないか?」

抱き留めいた篠原さんを離して、肩を掴んで、慌てて確認する。

「あ、はい、だ、大丈夫…です。」

「本当ですか?違和感とかもないですか?」

「よかつたあ〜」

ようやく、安堵のため息をつく。

気が抜けてしまったのか、体全体が痛み出して、目の前がチカチカしてくる……

プツンと何が切れる感覚がした……

目の前にいた彼がホツとした様子から一転、肩に触れていた彼の手の力がするりと抜けてそのまま私に寄りかかってきた。

「……んツ!?／＼／＼」

彼が思いっきり密着してきて、思考は真っ白でも、顔は真っ赤になってしまった。そして、変な声まで出る始末。いや待て、落ち着くんだ私。とりあえず冷静に冷静に……。私が不動さんを助ける為に飛び出して来た時逆に抱きつかれて助けて貰った。あのままだと彼は刺されていたかもしれない……。と、その瞬間は思った。しかし、あの場にあった彼のお兄さん達は動かず見ていたあたり、彼にはあれを対処できる術がすっかり備わっていたのかもしれないと、今その冷静な判断が出来た。

何故、あの時彼を助けようと飛び出してしまったのかは、今では分からない。

多分、咄嗟の出来事で訳が分からなくなったのだろう。一種のパニック状態みたいなものだったのだろう。

急に密着して来たので、煩惱を振り払うかのごとくすぐさま思考を切り替えるが彼は一向に離れない。

「あのく流石に離れて頂いてもいいですか……流石に不動さんのお兄さんとかにも勘違いされますし、私もここでこんなに密着されたら流石に恥ずかしいので。」

呼びかけても起きない。し、その後肩を思いっきり揺すつても起きない……

「……雄也様!!不動さんが目を覚ましません!!」

不安が先進を駆け巡り、大声を出して彼のお兄さんと呼んだ。私でも驚く程声が出

た。

その大声にすぐさま駆け付けてくれた雄也さんは、彼の容態をじっくり観察して、すぐに口を開いた。

「莉奈ちゃん安心していいよ。こいつ、ただ気を失っているだけだから。多分失神だと思ふ。あと数分もしたら目が覚める。こいつは、俺が医務室に運んでおくから、お父さんと一緒に帰りな。もうそろそろ、パーティーもお開きの時間だ。」

「わかりました。」

「本当に安心してくれ。こいつが目覚めたら君に連絡するように言っておく。後、今うちの秘書が今回の騒動に関して、君のお父さんに伝えに行っているから。」

「はい、ありがとうございます。」

雄也さんは私を宥めてくれたが、結局私の不安が拭われることはなかった。

お父さんが迎えに来てくれて、私達は車で帰路についてた。

お父さんが私の迎えに来た時に、抱きしめてくれたが、同じ男の人でも、父と不動さんでは、また違った温もりを感じ、不動さんの時、私は胸が高鳴っていた事を改めて実感した。

車中では、今日のパーティーと騒動について話をしていた。

お兄さんが話していた通り、秘書である京介さんが事細かに話していたのか、私に聞くことは最小限になっていた。

「にしても、真澄くんには感謝しないとね。一応依頼は聞いてもらったしね。まあその依頼者に危険を及ぼした事は褒められたことじゃないけど、信頼してもいいと僕は思うよ。」

「私もそう思う。と言つても、ナンパに絡まれたのも、危険な目にあつたのも、私のせいだよ。」

「え!? そうなの? 僕は京介君からは莉奈は何もしていない。ただ真澄くんがやり過ぎただけだ。と、そう聞いていたんだけど?」

食い違う。多分、京介さん事実を少し曲げてして伝えたのだろう。私が依頼者だから、全部その依頼を受けた不動さんに責任を押し付けた……

いや、あの人はそんなことはしない。多分不動の意志か、彼に関するなにかが関わっているのだろう。

私は話の食い違い部分を全部話した。

「そう、だったのか……なんで隠したんだろうって言つても事実を話したら莉奈を叱ると思つたのかな? それとも何か誰かの意思が関与しているのか……まあ、僕には分からない

いけど、事実を話してくれてありがとう。」

「なんか、全部不動さんのせいにするのは気が引けるから。」

「そうか…今日は彼に関して何かわかったかな？」

「彼は権力が嫌いなんだと思う。そして、それがあの事件で酷さがまして、本心まで、抑え込むほどに。」

彼が本心と思われる言葉を言った際に一人称がこれまで使うことのなかった「俺」に変わっていた。

これは私の予測でしかない、そして、彼があ的事件の真相を何処まで知っているのかも分からない。だけど、今日一日いてわかったことがある。

彼は写真の女性が言った通りの人間だ。本心と思われる発言をした際の口調と雰囲気、聞いた通りだった。

多分、基本誰にも見せないだけで根っここの部分は変わっていないはずなのだ。

決めた…

「お父さん。突然だけどき……」

集合

パーティーから2日後、自分は、いつも通り部室でお客を待っていた。

あの事件の後、気を失った俺は本社医務室で目を覚ました。俺からどれくらい気を失っていたのだろうか、京介さんに訪ねるとたったの15分ぐらいとの事らしい。

あれから、篠原さんの胸の中で気を失った後、パーティーは終わり、江雪誠次は親から勘当を言い渡されたらしい。

どうやら、あちらもこの事は大事にしたくないらしく、エーユー製薬と二条製薬、そして、うちの兄の関係もそのまま維持になったらしい。

俺は目を覚ましたあと、すぐさま依頼者であった篠原さんに電話で謝罪をした。篠原さんとの謝罪の電話から伝わってきたのは信頼と心配だった。彼女の「守ってくれてありがとうございました。」と言われた時、自分は本当の意味で安心したが、彼女には心配をかけただろう。

そんな電話の中に登校日に時間が欲しいといった内容の話があった。

という事で今日、こうして部室で待っているというわけになる。

「疲れ、とれてないのか？」

スマホを弄りながらこちらに話しかけてくる翼。彼は俺一人で依頼をこなしていることを知っている。まあ、依頼者と内容は話してないのだが、疲れが目に見えて出ていたのかもしれない。

「疲れてない……って言いたいところだが、こう、精神的な疲れは残ってるかもな。」

「なんかしたのか？」

「……やらかした。」

その一言に驚いたのか、こちらを向きてからするりと落ちていくスマホを自分は目で追った。

「スマホ、落ちたぞ。」

「いやいやいやいや、え!? あ、スマホは多分大丈夫ってそうじゃあねーっての!!」

「そんな、驚く事か？」

「お前! 驚くも何も!?! え、お前がやらかしたって!?! 完璧超人のお前が!?!」

顔がどんどん近づく。

「近い近い!! ちよつと離れろ。興奮し過ぎだ。」

自分が翼と距離を取ろうとした時、ノックのないまま、部室のドアが開く

「しっつれいしまーす……へ?」

部室に入ってきたのは柚木さん。

自分は近づいてきた翼を剥がそうとしている状態。それを目撃した柚木さんは間拔けな顔をした後、みるみる顔を赤く染め上げていった。

「た、たたたたつくくん!?もしかして、これは……BとLな感じなの?」

「え!?!」

その発言に、自分と翼は目を合わせた。

確かに今のこの状況は、無理やりキスしようも迫ってきた翼を引き剥がそうとしている風にも捉えられる。

「そういうのは、いいかもしれないけど……流石に学校の敷地内、部室の中は……その、はしたないというか……」

「違う!!」

同時に否定をした後、翼は柚木さんに近づき、方を掴んで説得している。

「俺と真澄は、そういうった関係じゃないし!!友達で部活仲間!!それ以上でもそれ以下でもない!あと!!俺の好きな人は女性だっ!こんな完璧超人では無いし、男でもない!」

柚木さんはその勢いに圧倒されながらうんうんと頷く、少しは落ち着いたか?

自分が慌ててる以上に慌てた人を見ると少し落ち着くやつだな。

「そうですよ。こんな脳筋自分もごめんですよ。後、自分も恋愛対象は女性だけですの

で、こんなゴリラ願い下げですよ。」

「おい、聞いてれば脳筋だのゴリラだのバカにしてんのか？ お前だって成績は同じぐらいなはずだぞー！」

「成績は、な。」

そんなイザゴザをしていると、柚木さんが笑い始めた。

「アハハ、確かに仲のいい友達みたいだね。いやー、最近友達にそういう本を勧められていたから、てつきりって思っちゃったよ。ごめんね。」

そう言つて、恥ずかしそうに答えてくれた。

「それで、柚木さんは何用でここに来たんですか？」

「おっと、そうだそうだ。これ！」

そう言つて、渡された大きめの茶封筒。

それを受け取り中を取り出し確認する。

「入部届と、なんですかこれ？ 推薦書？ みたいな…」

「入部届？ なんでユノが？」

「推薦書のようなものには、調理部の部長さんと顧問の先生からですね。」

「うん、先生と部長に頼んで作ってもらいました。この部活に入りたくて。」

「そうですか…」

どうしようか悩んでいると、ノックの音がした。

そういえば突然来て掛け看板の表示を変えるのを忘れていたな。

その後、ドアノブを回す音がして、空いているのを確認したのか、ノックの主がそのまま部室へ入ってきた。

「失礼します……と、御取り込み中ですか？」

姿を見せたのは篠原さんであった。

「あ、しのりん!!」

「由乃さん。」

どうやら2人は知り合いらしい。

柚木さんは勢いそのまま篠原さんへ抱きついた。

勢いと思いきしの良さで篠原さんはあわや倒れそうになるが、何とか耐えたみたいだ。

「ちよつと…待ってください。あの、少し苦しいです。」

「むうふふふ。もう少しもふもふさせるのですよ!!」

あ、可愛い系と綺麗系の子同士がゆりゆりしている…なんというか、見てはいけないうような。けど、凄くイイ。取り敢えず言えることは、百合の間に割って入る男は殺したるって事か…

「真澄さん。」

「なんですか、翼さん。」

「ご飯何杯行けますか？」

「そりゃ、3杯でも4杯でも。」

そういうと、大きく頷く翼。我ながら酷い内容と共感の話をしてしまった。仕方ないよね。自分だって年頃の男の子ですもん。あんな素晴らしい風景を見て、何も思わないとかそんなことは無い。

いやいや、今はそんな事じゃなくて、早く篠原さんから要件を聞かねば……

そう思い、口を開こうとした時、柚木さんが先に話し始めた。

「ん？しのりん、その今持つてるものって何？」

柚木さんの抱き着きの力が緩んだのか、されるがままだった篠原さんは彼女の腕からするりと抜け、持っていた紙を自分に渡してき

た。

「これは報酬です。」

そう言って渡した紙には『入部届』と書いてある。

「篠原さん。知つての通りうちの部活は報酬を受け取らないんです。それに報酬がこれって……」

なんと大胆な！これじゃ私が報酬ですなんて言っているようじゃないか……いや、これは自分の心が穢れているからだ。

仕方がないよねっ！

そんな邪念を振り払っていると、柚木さんが近づき、俺の手元を覗き込んできた。

「え!?しのりんも入部希望なの?」

「由乃さんですか?」

「うん!つて言っても、こうやってしのりんと同じく入部を渋られてるけどね……」

そういうと2人して自分の顔を同時に見つめられる。

「どうしてそんなに、この部活に入部したいんですか?はつきり言ってこんな面倒で偽善で、見返りのないし、人によつては感謝もされないこんな仕事をなんでしたいんですか?」

はつきりと言う。

この部活は自分が自分による自分の為の踏み台であり、自己満足する為の部活だ。他人からも踏み台や厄介祓い等の扱いも受ける。そんな、偽善の場だ。偽善者の戯れだ。何も出来なくて、守られて、そして、自分が嫌いな権力と大きな力で全てが解決してしまつた『あの事故』の時のように無力な自分で居たくないだけ……

それだけの為、自分が誰かから必要とされて、それを自分だけの力で解決する場所が

欲しかっただけのこの部活なのだ。

そんな捨て場所のような部活に彼女らを巻き込んではいけない。

翼は自分から入部の話をした時あいつはこの場を踏み台にしてもいいといった覚悟の目をしていて。それだけ叶えたい事があるということだ。バスケット部の助っ人で初めて会った時から目の前のこの場所は眼中に無く、ただの通過点だという未来を見据えた人間の目をしていてから誘おうとした。

「こんな場所には彼女らには相応しくない」

「手順を踏んでいるだけで、私は無理やりでも、この報酬は受け取ってもらいますよ。」

ニコニコしながらとんでもない発言をしてきた篠原さん。

「なんなら、一緒に由乃さんも一緒に行きましょう。そうしましょう!!」

「ええ!! け、けど、うちの学校は、教師が勝手に部員を入れて、部員達の混乱を招かない様に、部長に入部届けを出して、それを担当教師に渡すって、決まりになってるじゃない!」

柚木さんが言う通り、教師と部長が部員を把握でき、勝手に部に入れないような仕組みになっている。

「どうやってそんな抜け道を使って部活に入ろうとするんだ」というか入部手続きに抜け道とかあったのかよ。」

「はい。ですけどこの部活の場合通す事が出来るんですよ。これは、〃この部活〃で部長が〃不動さん〃だから出来る抜け穴なんですよ。」

一呼吸して、篠原さんは続けた。

「私、依頼を持ってきた日に聞いてしまったんです。この部活部員が足りなくて、今年中に規定人数を揃えないと、廃部になってしまうというお話を…」

「……聞かれていたんですか。」

「部屋に着いた時に、そういう話をしていたので、消して盗み聞きした訳ではないです。」

「いえ、疑ってませんよ。」

「それなら良かったです。」

安堵したのか、ホッと息を着いた篠原さん。

「それで、あの依頼を受けてもらった後に、生徒会長にここの部活は部員を募集しているか等を聞いたところ、『もし、入部の際に真澄に断られたら、俺に言ってくれたら問答無用で通すから。恩人である俺の頼みを無下にする事はアイツには出来ないからな!』というお話を受けました。それと、依頼の日に宮坂先生からも、『よろしく願います。』というお言葉をもらいました。」

笑顔は崩さず、『貴方には受取拒否出来る逃げ場はありません。』とそう伝えられた。

「ごめんなさい。無理やいな事をしてしまって。でも、何故頑なに部員を入れたがらな

いかは分からないですけど、もしかして“過去のあれ”が原因ですか？」
その言葉に全身から嫌な汗をかいた。

何故篠原さんが事故の事を知っている…確かにあれはニュースにはなった物の名前等々は伏せられてははずなんだ。兄貴や相手側の権力を使って伏せられている…はず…

いきなりでた、“過去のあれ”という単語に混乱と同様を繰り返し、冷静な判断が出来ない。何故、どうして、が頭の中をぐるぐるすると駆け回り、周りの音さえも聞こえないぐらい、どうしようもなくなっていくた。

「おい、聞こえてるのか真澄!!」

「なにがだ…」

「お前が過去不良だったって話！って、大丈夫か？お前顔色悪いぞ。」

「そうか、で、誰が不良だったって？」

「ん、お前だよ。お前。たった今篠原さんがそう言った。」

篠原さんが？というか不良って確かに中学時代の俺は酷いもんだったけど、不良はないだろ。

「不動さんは過去、不良でその償いというか、真っ当に一人で人助けしたくて、この部活を立ち上げたんじゃないんですか？」

「では、篠原さんが知っている過去って、この事ですか？」

「はい、これですよ。これ以外は今の不動さんしか知りません。あ、これもお兄さんから聞きましたよ。」

「そう、ですか。」

不安だったものが全て解消されたのか、思考でぐちゃぐちゃになっていた脳内がクリアになった……途端に、恥ずかしい事を暴露された事がまた思考で埋め尽くす。

え?!はつず!というかなんで知ってんだよ!!いや、ちゃんとやってたなクソ兄貴がまたべらべらと喋ったみたいだ。

「あれ?不動くん。顔真つ赤になってる。」

「ほんと、珍しいな。真澄がこんなになるなんて。」

ああ、依頼でもやらかして、今日は過去を暴露されて……なんて日だ。

「さて、不動さんの秘密を打ち明けた以上、この部活に入部させなければ、これを広めません。という脅しも聞くようになりました。さて、どうしますか?」

「わお、しのりん怖い……」

怖いも何も、チエックメイトじゃないか。

もうやれる手立てはない。

しかも、ここで柚木さんだけ入部拒否という事が出来ない状態にまで詰んでいる。

「お手上げですね。2人とも入部を認めます。」

「……いいの？ 私何もしてないけど。」

「なにもって、しつかり準備してきてたじゃないですか、あそこまで推薦されれば充分ですよ。」

「よかつたあ。」

安堵する柚木さんを見た後、自分は篠原さんに目線をやる。するとそれに気づいたのか、バツが悪そうにこちらを見てきた。

「本当にごめんなさい。私がやった事は不動さんにとっては不愉快な事をしましたし、あらゆる汚い手をつかいました。」

「こんな事を聞き返すのは何ですけども、こんな私を、本当に入部を認めていいんですか?」

「怒っていませんが、あんなえげつない事をしておいて、今更ですか?」

「え、えげつない……確かに……」

「ですが、この場合。最後まで準備が出来ている人が勝つのは当たり前です。今回は自分の完敗という事で、これからよろしくお願いします。」

「はい、よろしくお願いします!」

自分は正式に2人から入部届けを受け取った。

部員探しを本格的に始める前に、あっけなく終わってしまったが、ここからこの部活にさらなる異変を持つてくる事を期待して
さて、今日も支援しますか…